
研究

高校生がSNSで知り合った異性と 対面で会うまでのやりとり⁽¹⁾⁽²⁾

Examining the interactions on SNS that result in meetups among high school adolescents

キーワード：

ソーシャル・ネットワーキング・サービス, 高校生, 類似性, コミュニケーション, やりとり過程

keyword：

Social networking service, High school adolescents, Similarity, Communication, Interaction process

筑波大学大学院・日本学術振興会特別研究員 仲 嶺 真⁽³⁾

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba / JSPS Research Fellow Shin NAKAMINE

筑波大学大学院 田 中 伸之輔⁽⁴⁾

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba Shinnosuke TANAKA

筑波大学大学院・日本学術振興会特別研究員 上 條 菜美子⁽⁵⁾

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba / JSPS Research Fellow Namiko KAMIJO

要 約

近年、SNS利用者数の増加が著しい。SNSを有効活用できれば良好な人間関係が築ける可能性が高まる一方で、SNSで知り合った異性と対面で会ったことによって未成年がトラブルに巻き込まれる事案が社会問題となっている。SNSで知り合った異性と対面で会う理由に関して、個人特性との関連や、やりとり内容との関連が検討されているものの、やりとり過程については十分に検討されているとは言い難い。SNSで知り合った異性と対面で会うまでには、継続的にやりとりが続いていると考えられるため、

原稿受付：2019年1月10日

掲載決定：2019年8月10日

やりとり内容だけでなく、どのようなやりとりを経て対面で会うに至っているのかを検討する必要があると考えられる。そこで本研究では、高校生を対象に、SNSで知り合った異性とSNS上でどのようなやりとりを経た結果、対面で会うに至るかについて検討した。SNSで知り合った異性と対面で会った経験がある高校生および高専生207名を対象に、SNSで知り合った異性と行ったやりとりに関して調査した。その結果、地元が一緒であることや趣味などの共通の話題について継続的にやりとりをした結果、対面で会いやすくなることが示された。また、相手が自分に会いたい場合ではなく、自分が相手に会いたい場合に対面で会っていることも示された。これらを踏まえ、禁則的な防犯教育とは違った形の防犯教育が今後必要であることが議論された。

Abstract

The purpose of this study was to examine how high school adolescents interact with a person of the opposite sex acquainted through SNS and what kind of the interactions result in meeting him or her in real life. A total of 207 high school adolescents who had experienced meeting in someone of the opposite sex acquainted through SNS reported their SNS interactions before the meetup. Results showed that the successive interaction about a common subject such as local being the same and hobbies led to meeting the person in real life. In addition, results showed that high school adolescents met in person not when he or she wanted to see them but when they want to see him or her. Based on these results, future contents of crime prevention education are discussed.

1 はじめに

SNS利用者は年々増加し、2017年末には7,216万人（普及率72.1%）に達した（ICT総研, 2018）。SNSは人間関係の維持、新たな人間関係の構築、興味の開拓を支えるオンラインサービスである（川浦・坂田・松田, 2005）ため、有効に活用できれば、良好な人間関係の維持や、新たな構築につながる可能性が高まると考えられる。

しかし、近年SNSを介して知り合った異性と対面で会ったことで、未成年がトラブルに巻き込まれる事案が社会問題化している。警察庁（2018）によると、SNSに起因する事犯の被害児童数は全体として増加傾向にあり、その対策が求められている（小出, 2008；緒方, 2014）。この対策を考えるためには、未成年がSNSで知り合った異性と対面で会うに至る理由について明らかにする必要があると考えられる。

先行研究では、SNSなどのインターネットで知り合った異性と対面で会うに至る理由に関して、個人特性に着目した検討が多かった。たとえば、花井・小口（2005）は、出会い系サイト利用者を対象に、出会い系サイトの利用と孤独感との関連を検討した結果、孤独感の高い人ほど出会い系サイトを関係形成目的で使用していたことを明らかにした。Caplan（2003）やMcKenna, Green, & Gleason（2002）も孤独感に着目し調査した結果、孤独感の高い人ほど、インターネットで知り合った他者（同性も含む）とのコミュニケーションを好み、対面で会いやすいことを示している。また、高比良（2009）も、社会生活への適応が悪く、社会的リソースに恵まれない個人は、オンラインの対人関係の新たな形成に積極的であると示唆している。

以上のように、個人特性とインターネットで知り合った異性と対面で会った経験との関連に関してはいくつかの研究が実施されており、一定の成果が明らかにされている。今後、さらなる知見を

得るための検討点の一つとして、SNSでのコミュニケーション（以下、やりとりとする）に着目することが有用と考えられる。なぜなら、SNSでのやりとり内容によって、対面で会うに至るかが左右されると考えられるためである。たとえば、橋元・千葉・天野・堀川（2015）によると、女子高校生がSNSで知り合った男性とやりとりをやめた理由として「話題がつまらなかった」（42.5%）が最も多く、次いで「性的な話題、下ネタが多かった」（38.0%）があげられていた。一方、女子高校生がSNSで知り合った他者（同性含む）とやりとりをした理由としては、「共通の趣味や嗜好を持っていることがわかったから」（75.7%）が多くあげられていた。また、加藤（2013）は女子中高生のインターネットを介した出会いの過程について、彼女らの心理に着目して分析を行った。その結果、彼女らはインターネットで相手と知り合った際に「否定的感情」を抱きながらも、相手とのやりとりを通して実際に対面で会う「積極的理由（たとえば、共通の趣味に関するやりとり）」を見つけ、対面で会うに至ることが示されている。

その他にも、対面で会うに至るまでのやりとりに関わる研究はいくつか存在し（Baker, 2000; Walther, 1996）、SNSでのやりとり内容と対面で会うに至るかどうかについては研究が進みつつある。しかし、やりとり過程については十分に明らかにされていないと考えられる。すなわち、見知らぬ異性とのSNSでの交流はどのようなやりとり内容で始まり、どのようなやりとり内容を経て、対面で会うに至る（あるいは至らない）のかについては十分に明らかにされていないと考えられる。SNSで知り合った異性と対面で会うまでには、継続的にやりとりが続いていると考えられるため、やりとり内容だけでなく、どのようなやりとりを経て対面で会うに至っているのかを検討する必要があるであろう。この検討は、未成年がSNSで知り合った異性と対面で会うに至る理由につい

ての研究知見を発展させるとともに、防犯上の適切な対策を検討するための資料になりうると考えられる。そこで、本研究では、未成年者の中でもスマートフォンの所有・利用率が95.9%である高校生（内閣府，2019）を対象に、SNSでのやりとり過程、すなわち、SNSでどのようなやりとりを経た結果、SNSで知り合った異性と対面で会うに至るのかについて探索的に検討する。

2 方法

2.1 調査参加者と手続き

調査は株式会社マクロミルに委託し、2014年12月22日から27日に実施された。同社登録モニタのうち高校生・高専生と登録していた46,300名に事前調査票が配信され、5,000名から回答を得た。事前調査票では現在の職業や「SNSで知り合った異性と対面で会った経験」の有無などを尋ねた。5,000名のうち、現在の職業が高校生・高専生であると回答した者は4,103名（男性1,242名、女性2,861名、 $M_{age}=16.9$, $SD_{age}=0.92$ ）であった。このうち「SNSで知り合った異性と対面で会った経験がある」と回答した高校生・高専生325名に本調査票が配信され、223名から回答を得た。ここから、マクロミルが独自開発した短時間回答者を削除するシステムを用いて短時間回答者を削除し、高校生・高専生207名（女性112名、男性95名、 $M_{age}=17.1$, $SD_{age}=0.85$ ）が調査参加者となった。なお、本研究は所属機関の研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

2.2 測度

2.2.1 初めに連絡をとったSNS

見知らぬ異性とSNSを通して知り合った経験のうち、最も印象的な経験を思い出してもらい、その異性に初めて連絡をした、あるいは、連絡がきたSNSについて自由記述で回答を求めた⁽⁶⁾。

2.2.2 初めに連絡をとった内容

最初に連絡をとったときにどのような内容の連絡がきた、あるいは、連絡をしたかについて自由記述で回答を求めた。

2.2.3 連絡をとっている間に生じた誘い

連絡をとっている間に生じた誘いについて、「連絡先（メールアドレスや電話番号）を聞かれた」、「連絡先を聞いた」、「実際に会おうと言われた」、「実際に会おうと言った」、「連絡先を教えた」、「連絡先を教えてもらった」、「上記のようなことはなかった」の中から複数回答で回答を求めた。

2.2.4 誘いが生じるまでの連絡内容

先の問いで「上記のようなことはなかった」と回答した調査参加者以外に対して、そのような誘いが生じるまでにどのような内容の連絡をとりあったかについて自由記述で回答を求めた。

2.2.5 対面で会った経験

連絡をとっていた相手と実際に会ったかどうかを尋ねた。

3 結果

分析対象者は、自由記述回答に不備がみられた13名を除く、計194名であった。

3.1 初めに連絡をとったSNSの種類

初めに連絡をとったSNSについての自由記述回答を分類した結果、14種類のSNSがあげられた。最も多くあげられたSNSはTwitterであった ($n=100$, 51.5%)。複数人にあげられたSNSは、LINE ($n=23$, 11.9%)、チャットサイト ($n=10$, 5.2%)、LINE掲示板などの掲示板 ($n=10$, 5.2%)、Facebook ($n=8$, 4.1%)、Skype ($n=7$, 3.6%)、Ameba ($n=7$, 3.6%)、GREE ($n=6$, 3.1%)、mixi ($n=6$, 3.1%) であった⁽⁷⁾。

3.2 連絡内容の分類および連絡をとっている間に生じた誘いの肯定率、実際に会った割合
 初めて連絡をとった内容および誘いが生じるまでの連絡内容の自由記述回答を分類した。分類は、調査目的を知らない大学院生1名と第一著者が、KJ法(川喜田, 1986)を援用して、記述の類似性を基に行った。その結果、初めて連絡をとった内容は12カテゴリ、誘いが生じるまでの連絡内容は10カテゴリを生成した(表1)。初めて連絡をとった内容で最も記述されたカテゴリは「挨拶(はじめましてなど)」、誘いが生じるまでの連絡内容で最も記述されたカテゴリは「共通の関心事(共通の趣味など)」であった。なお、「その他/なし/覚えていない」の記述数が多いのは、「なし/覚えていない」が多くを占めるためであり、「その他」の記述例としては「うん」などがあつた。

連絡をとっている間に生じた誘いを選択した者の割合は表2に示した。「実際に会おうと言われた」経験が最も報告されていた。誘いがない経験を報告した者も1割程度存在した。また、実際に会った経験を報告した者は122名(分析対象者の62.9%)であり、半数以上の者が実際に会った経験を報告していた。

3.3 対面で会うに至るやりとり過程

どのようなやりとりを経た結果、SNSで知り合った異性と対面で会うに至ったかを検討するため、数量化理論Ⅲ類(以下、Ⅲ類とする)を行った。

まず、初めて連絡をとった内容および誘いが生じるまでの連絡内容の各カテゴリが選択された場合は2、選択されなかった場合は1と数値化した。その際、記述人数が少ない「連絡先交換」および「想像」と、「その他」や「覚えていない」、「なし」は分析から除外した。その結果、初めて連絡をとった内容あるいは誘いが生じるまでの連絡内容のいずれかにおいて、選択されたカテゴリがない調査参加者は分析から除外した。

次に、連絡をとっている間に生じた誘いの選択肢をカテゴリとみなし、各カテゴリが選択された場合は2、選択されなかった場合は1と数値化した。その際、「上記のようなことはなかった」は、分析から除外した。

表-1 SNSでの異性とのやりとりの内容

カテゴリ	記述例	割合
初めの連絡 (n=194)		
挨拶	はじめまして	40.2% (78)
共通の話題	地元が一緒です	28.9% (56)
誘い	会いませんか	8.8% (17)
自己紹介	(氏名)です	6.7% (13)
雑談	雑談をした	6.2% (12)
好意表明	かわいいですね	5.7% (11)
掲示板利用	掲示板見ました	5.7% (11)
呼びかけ	絡もう	5.2% (10)
連絡先交換	連絡先交換しよう	2.1% (4)
その他/なし/覚えていない		19.6% (38)
誘いが生じるまでの連絡 (n=168)		
共通の関心事	共通の趣味	50.0% (84)
個人情報	年齢	40.5% (68)
世間話	日常の話	22.0% (37)
人間関係	友人の話	10.7% (18)
内面的会話	相談	7.7% (13)
交流希望	ライブに行きませんか	7.1% (12)
想像	会ったとしたらどこに行 く?	3.0% (5)
その他/なし/覚えていない		16.7% (28)

注) 括弧内は該当カテゴリの記述をした人数。

表-2 連絡をとっている間に生じた誘いの割合

選択肢	割合
連絡先を聞かれた	44.3% (86)
連絡先を聞いた	20.1% (39)
実際に会おうと言われた	53.6% (104)
実際に会おうと言った	26.8% (52)
連絡先を教えた	33.5% (65)
連絡先を教えてもらった	30.9% (60)
上記のようなことはなかった	12.4% (24)

注) 括弧内は該当カテゴリの記述をした人数。

最後に、実際に会ったかどうかで「会った」場合は2, 「会っていない」場合は1と数値化した。この手続きにより分析に含まれた21のカテゴリに対して、Ⅲ類によりカテゴリスコアの1・2・3軸を算出した。固有値は順に.12, .10, .09であった。算出された3軸までのカテゴリスコアを用いてクラスタ分析(Ward法)を行い、四つのクラスタを抽出した⁽⁸⁾(図1)。

第一は、「挨拶」、「自己紹介」「個人情報」、「世間話」、「内面的会話」、「連絡先を聞かれた」、「実際に会おうと言われた」から構成されるクラスタ、第二は、「共通の話題」、「共通の関心事」、「交流希望」、「連絡先を聞いた」、「実際に会おうと言った」、「連絡先を教えた」、「連絡先を教えてもらった」、「会った」から構成されるクラスタ、第三は、「誘い(初めての連絡内容)」、「雑談」から構成されるクラスタ、第四は、「好意表明」、「掲示板利用」、「呼びかけ」、「人間関係」から構成されるクラスタであった。

4 考察

本研究では、高校生がSNSで知り合った異性とのようなやりとりを経て対面で会うに至るのかについて検討した。

4.1 SNSで知り合った異性と対面で会った高校生の割合

本研究の事前調査では高校生・高専生の7.9%がSNSで知り合った異性と対面で会った経験があった。橋元ほか(2015)では女子高校生(n=554)の約20%が異性とあった経験があると報告しており、本研究との結果に10%以上の差があった。ただし、やりとり内容に関しては先行研究(橋元ほか, 2015; 加藤, 2013)と同様の結果が得られており、以下で考察するやりとり内容およびやりとり過程に関しては一定の妥当性があると考えられる。

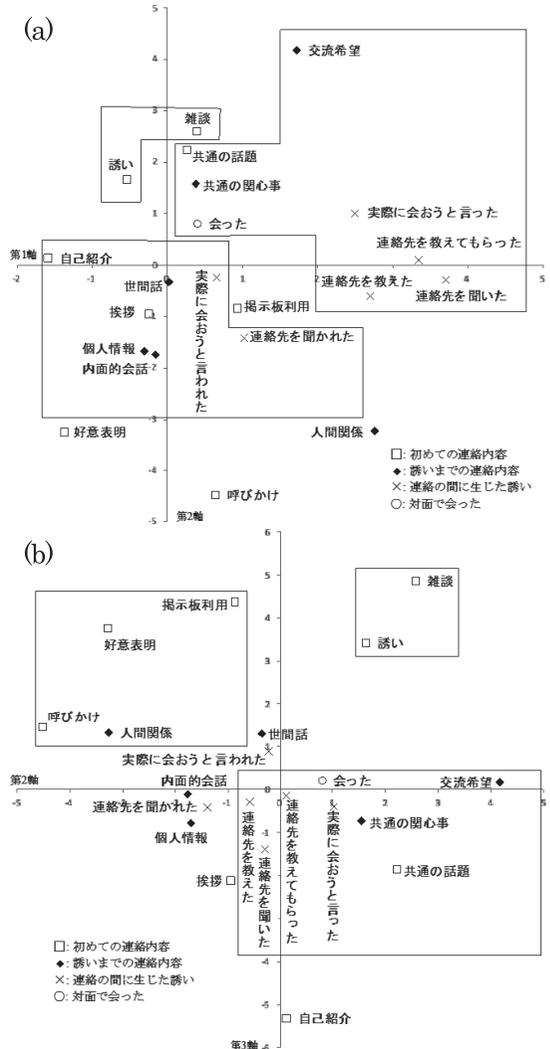


図-1 数量化理論Ⅲ類によるやりとり内容のカテゴリスコアのプロット。(a)は第1-2軸, (b)は第2-3軸のプロット。囲み線(あるいは囲み線なし)は同クラスタであることを表す。

4.2 SNSにおけるやりとり内容

やりとり内容の分類に関する結果からは、SNSにおいてもオフラインにおける異性関係と同様に行動が進展していることが窺えた。すなわち、オフラインにおける恋愛行動の進展として、まずは友愛的会話から始まり、徐々に深い内容になっていくことが示されているが(松井, 2006), SNSでの会話も、はじめは「挨拶」や「共通の話題」

などの友愛的会話からはじまり、その後「人間関係」や「内面的会話」などの徐々に深い内容の会話が現れるといった、オフラインにおける恋愛行動と同様の進展がみられると考えられる。

4.3 対面で会うに至るSNSでのやりとり過程

対面で会うに至るやりとりについて検討した結果では、四つのクラスタを生成した。この結果から、以下のようなSNSでの典型的なやりとり過程が推察される⁽⁹⁾。

第一は、初めての連絡内容、誘いまでの連絡内容、連絡の間に生じた誘いから構成されるクラスタであった。すなわち、「挨拶（はじめましてなど）」、「自己紹介（〇〇ですなど）」で始まり、「個人情報（年齢など）」、「世間話（日常の話など）」、「内面的会話（相談など）」を通して「連絡先を聞かれた」、「実際に会おうと言われた」という誘いを受けることが典型的な過程である。第二は、初めての連絡内容、誘いまでの連絡内容、連絡の間に生じた誘いから構成されるクラスタであり、「会った」というカテゴリも含まれた。すなわち、「共通の話題（地元が一緒ですなど）」で始まり、「共通の関心事（共通の趣味など）」や「交流希望（ライブに行きませんかなど）」の話の中から、「連絡先を聞いた」、「連絡先を教えてください」、「連絡先を教えた」、「実際に会おうと言った」という誘いが生じ、実際に会うことが典型的な過程である。第三は、初めての連絡内容だけで構成されるクラスタであった。すなわち、「誘い（会いませんかなど）」、「雑談（雑談をしたなど）」から始まるものの、その後のやりとりが続かないことが典型的な過程である。第四は、初めての連絡内容、誘いまでの連絡内容から構成されるクラスタであった。すなわち、「好意表明（かわいいですねなど）」、「掲示板利用（掲示板見ましたなど）」、「呼びかけ（絡もうなど）」で始まり、「人間関係（友人の話など）」について話すことが典型的な過程である。上述した典型的な過程のうち、対面

で会うに至るのは第二の過程であり、地元が一緒であることや趣味などのお互いに共通する話題を継続してやりとりすると対面で会いやすくなることが示された。

先行研究（橋元ほか，2015；加藤，2013）でも共通の趣味や嗜好が対面で会うに至る理由として重要であることが示唆されていた。本研究でも同様の結果が得られ、とりわけ、共通の趣味や嗜好についてやりとりを継続することが重要である可能性が示唆された。

これは、お互いに共通の話題が、互いの類似性を発見するようなやりとりであるためと考えられる。類似性は対人魅力に影響することが明らかにされている（Rubin, 1973）。従来の研究は、学校などの既存の社会的ネットワークにおける友人関係や恋愛関係の形成に類似性が及ぼす影響を検討していた（仲嶺，2015；Rubin, 1973）。SNSはそのような既存の社会的ネットワークとは異なることを踏まえると、学校などで形成される友人関係や恋愛関係だけでなく、SNSで知り合った異性と対面で会う要因としても類似性が影響力をもつことが示された。ただし、クラスタ分析は再現性の点で一定の限界がある。そのため、本研究の結果の一般化可能性を検証するためには、「類似性」の発見が対面で会うことに繋がっているかについて、その他の要因も含めた確証的な検討が今後必要である。

また、第二の過程は「自分が相手に会いたい」（自分が相手の連絡先を聞いたり、会おうと言ったりしている）過程であることにも特徴がある。誘われたから会っているのではなく、自分が会いたい相手と会っていることが示唆された。

4.4 防犯教育についての一考察

SNSで知り合った異性と対面で会ったことによるトラブルを防ぐための対策の一つとして防犯教育がある（小出，2008；緒方，2014）。これまでは、「未成年がSNSで知り合った異性と対面で

会うリスクを認識し、対面で会わないようにする」という禁則的な防犯教育が意図されていた(小出, 2008; 西村・村上・藤, 2014; 菅野, 2011)。しかし、「お互いに共通する話題を継続してやりとりした相手と対面で会いやすい」、「自分が会いたい相手に会っている」という本研究の結果は、未成年が本人なりに相手を選別して会っていることを示唆し、本人は危険だと思っていない(あるいは、リスクヘッジしていると思っている)可能性があることを示唆する。Reyna & Farley (2006)によれば、未成年(10代)はリスクを認識していないのではなく、リスクを認識した上で、それよりもメリットがあると判断するために危険な行動をしてしまう。本研究の結果は、Reyna & Farley (2006)と整合していると考えられる。これらを踏まえると、今後の防犯教育は、禁則的な防犯教育とは違った形も必要になると考えられる。

4.5 本研究の限界と展望

本研究には以下の3点の限界がある。第一に、本研究の調査参加者が、調査会社の登録モニタであった点である。調査会社の登録モニタを利用したWeb調査における回答者は、あっさりした人間関係を好む、インターネットとの親和性が高いなど、限られた集団である可能性があると言われている(吉村, 2001)。そのため、本研究の知見を登録モニタでない高校生や高専生にも適用できるかは慎重を期す必要がある。第二に、やりとり内容の網羅性およびやりとり期間・回数が不十分な点である。たとえば、橋元ほか(2015)では、「性的な話題、下ネタが多かった」や「写真を送れと言われた」などがやりとりの内容として挙げられているものの、本研究ではそのような内容は示されなかった。また、どれだけの期間、どのような回数のやりとりをしたかについては検討できていない。やりとり内容がある程度網羅し、期間や回数も含めてやりとり過程を精緻に検討す

ることで、対面で会うに至る理由が詳細に把握できるであろう。第三に、SNSで知り合った異性と対面で会った経験のある高校生・高専生のみを対象とした点である。SNSで知り合った異性はい一方、会ったことはない高校生・高専生とはやりとりの内容が異なる可能性もあるため、今後の検討が必要であろう。

最後に、今後の展望として、SNSで知り合った異性と対面で会ったことで実際にトラブルが生じた事例を対象に調査をすることが望まれる。実際にトラブルが生じた高校生などを対象に、SNSでどのようなやりとりをどの程度の期間行った結果、対面で会うに至ったのかを検討することでトラブルが起こりやすいやりとり過程を明らかにできる可能性がある。また、対面で会ったことでどのようなトラブルが起こったのか、対面で会うことを決める際にどのようなこと(たとえば、危険性について)を考えていたのか、対面で会う際に注意した点(たとえば、誰かと一緒に会うなど)はあるのかなどを面接などで丁寧に調査することで、SNSで知り合った異性と未成年者が対面で会うことによって生じるトラブルを減ずることが可能になるであろう。加えて、SNSから始まる異性関係という恩恵も享受できるようになると考えられる。これらの検討を続けることは、今後ますますSNSが普及する日本にとって重要な事柄であろう。

注

- (1) 本研究は、安心ネットづくり促進協議会2013年度研究支援事業の助成を受けて実施された。
- (2) 本論文にご指導をいただいた筑波大学の松井豊先生に記して感謝申し上げます。また、筑波大学の藤桂先生、湯川進太郎先生には論文執筆に際し、貴重なご意見を賜りました。記して感謝申し上げます。
- (3) 現所属は高知大学人文社会科学部。
- (4) 現所属は筑波大学人間系。

- (5) 現所属は東京成徳大学応用心理学部。
- (6) すべての調査参加者は、SNSで知り合った異性と対面で会った経験があった。しかし、回答の際は、SNSで異性と知り合った経験（対面で会った経験ではない）のうち最も印象的な経験についての回答を求めたため、SNSで知り合った異性と対面で会わなかった経験について回答した調査参加者もいた。なお、最も印象的な経験の回答を求めた理由は、実際に会うに至ったやりとり過程と会わなかったやりとり過程を明らかにするためであった。
- (7) 本研究ではSNSの種類によるやりとりの違いの検討を目的としていなかったことに加えて、Twitter以外のSNSをあげた回答者が少数であったことから、SNSの種類を含めた分析を行わなかった。
- (8) 男女でⅢ類およびクラスタ分析によるまとまりが異なるかを確認したところ、ほぼ同様のまとまりが得られたため、男女合わせて分析を実施した。
- (9) 街中における男女間のやりとりに関する研究（仲嶺，2015）では、Ⅲ類によって男女のやりとりを類型化し、その類型からやりとり過程を推定している。本研究ではこれに倣い、クラスタを解釈した。なお、Ⅲ類では軸の解釈を必ずしも必要としないという指摘（松井・高本，2018）に基づき、本研究では領域を解釈し、軸を解釈しない。

参考文献

- Baker, A. (2000) Two by tow in cyberspace: Getting together and connection online, *CyberPsychology and Behavior*, 3, pp.237-242.
- Caplan, S.E. (2003) Preference for online social interaction: A theory of problematic Internet use and psychosocial well-being, *Communication Research*, 30, pp.625-648.
- 花井友美・小口孝司 (2005) 「出会い系サイトの利用と孤独感：誰かと出会いたい人と誰かと話したい人」, 『学苑 (昭和女子大学)』 772, pp.1-10.
- 橋元良明・千葉直子・天野美穂子・堀川裕介 (2015) 「ソーシャルメディアを介して異性と交流する女性の心理と特性」, 『情報学研究・調査研究編 (東京大学大学院情報学環)』 31, pp.115-195.
- ICT総研 (2018) 「2018年度SNS利用動向に関する調査」, <<https://ictr.co.jp/report/20181218.html>> Accessed 2019, May 19
- 加藤千枝 (2013) 「青少年女子のインターネットを介した出会いの過程：女子中高生15名への半構造化面接結果に基づいて」, 『社会情報学』 2, pp.45-57.
- 川喜田二郎 (1986) 『KJ法：混沌をして語らしめる』中央公論社
- 川浦康至・坂田正樹・松田光恵 (2005) 「ソーシャルネットワークワーキング・サービスの利用に関する調査：mixiユーザの意識と行動」, 『コミュニケーション科学』 23, pp.91-110.
- 警察庁 (2018) 「平成29年におけるSNS等に起因する被害児童の現状と対策について」, <http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/H29_sns_koho.pdf> Accessed 2018, July 4
- 小出晋也 (2008) 「サイバー犯罪の現状と対策」, 『学習情報研究』 1, pp.22-23.
- 松井豊 (2006) 「恋愛の進展過程と時代的变化」, 齋藤勇 (編) 『イラストレート恋愛心理学：出会いから親密な関係へ』誠信書房, pp.62-71.
- 松井豊・高本真寛 (2018) 「心理学における数量化理論Ⅲ類の利用について」, 『筑波大学心理学研究』 56, pp.59-66.
- McKenna, K.Y.A., Green, A.S., & Gleason, M.E.J. (2002) Relationship formation on the Internet: What's the big attraction? *Journal of Social Issues*, 58, pp.9-31.

- 内閣府(2019)「平成30年度青少年のインターネット利用環境実態調査」, <<https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h30/net-jittai/pdf/2-1.pdf>> Accessed 2019, July 27
- 仲嶺真 (2015) 「街中で初対面の男性から話しかけられた女性の判断と対応」, 『心理学研究』 85, pp.596-602.
- 西村多久磨・村上達也・藤桂 (2014) 「インターネットを介した出会い：出会いを促進・抑制する要因は何か」, <<https://www.good-net.jp/files/original/201711012219288952823.pdf>> Accessed 2019, May 19
- 緒方禎己 (2014) 「サイバー犯罪の現状と対策」, 『そんぽ予防時報』 256, pp.26-31.
- Reyna, V.F., & Farley, F. (2006) Risk and rationality in adolescent decision making, *Psychological science in the public interest*, 7, pp.1-44.
- Rubin, Z. (1973) *Liking and loving: An invitation to social psychology*, Holt, New York, 286p.
- 菅野幸子 (2011) 「ケータイ安全教室：携帯電話と正しくつきあうために」, 『通信ソサエティマガジン』 18, pp.94-95.
- 高比良美詠子 (2009) 「インターネット利用と精神的健康」 三浦麻子・森尾博昭・川浦康至 (編) 『インターネット心理学のフロンティア：個人・集団・社会』 誠信書房, pp.20-58.
- Walther, J.B. (1996) Computer-mediated communication: Impersonal, interpersonal, and hyperpersonal interaction, *Communication Research*, 23, pp.3-43.
- 吉村宰 (2001) 「インターネット調査にみられる回答者像,その特性」, 『統計数理』 49, pp.223-229.